

日本倫理学会第71回大会ワークショップ

「なぜ倫理学に進化が必要か」

ワークショップ趣旨説明、  
提題「道徳に関する事実を  
進化的観点から説明する」

2020年10月2日

矢島 壮平（中央大学国際情報学部 [i T L]）

## 0. 今日の発表の内容

### 1. ワークショップ趣旨説明

### 2. 提題「道徳に関する事実を 進化的観点から説明する」

#### 2. 1 シンガーによる論点整理

#### 2. 2 道徳の合目的性の説明

##### 2. 2. 1 スミスの説明

##### 2. 2. 2 進化的説明

#### 2. 3 おわりに：規範は正当化可能か

# 1. ワークショップ趣旨説明

# 1. 趣旨説明

「進化倫理学をやりたい」と言うと、必ずと言っていいほど問われる問い、それは...

## なぜ倫理学に進化が必要なのか？

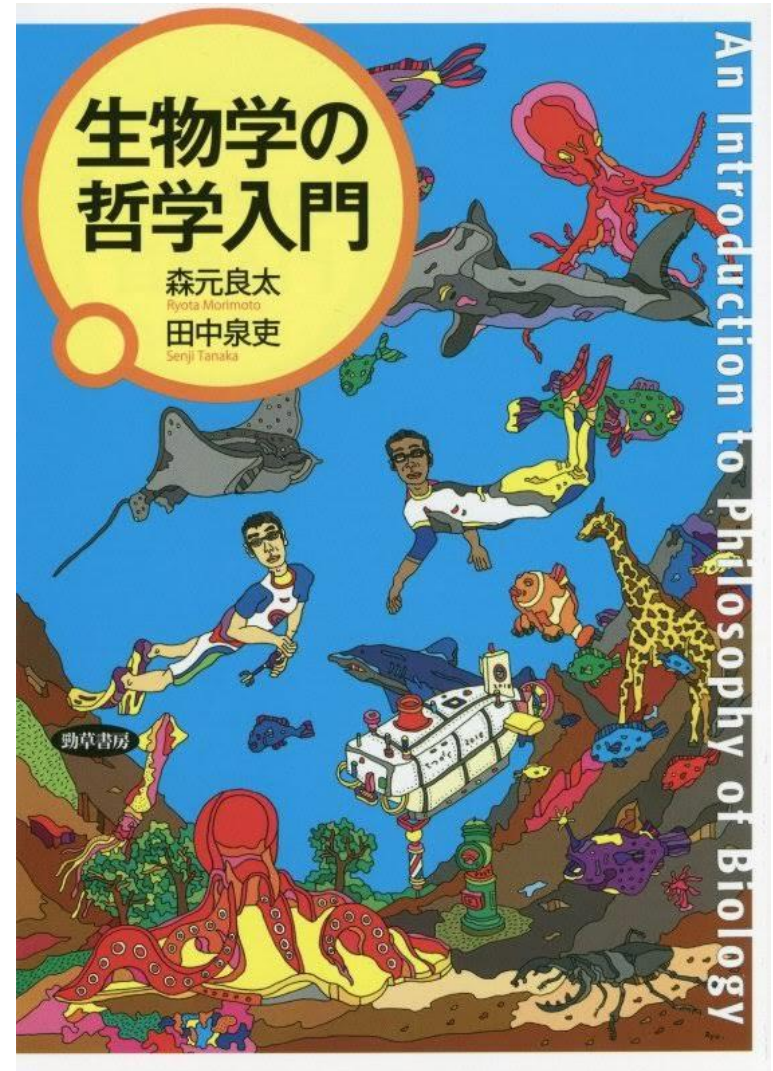
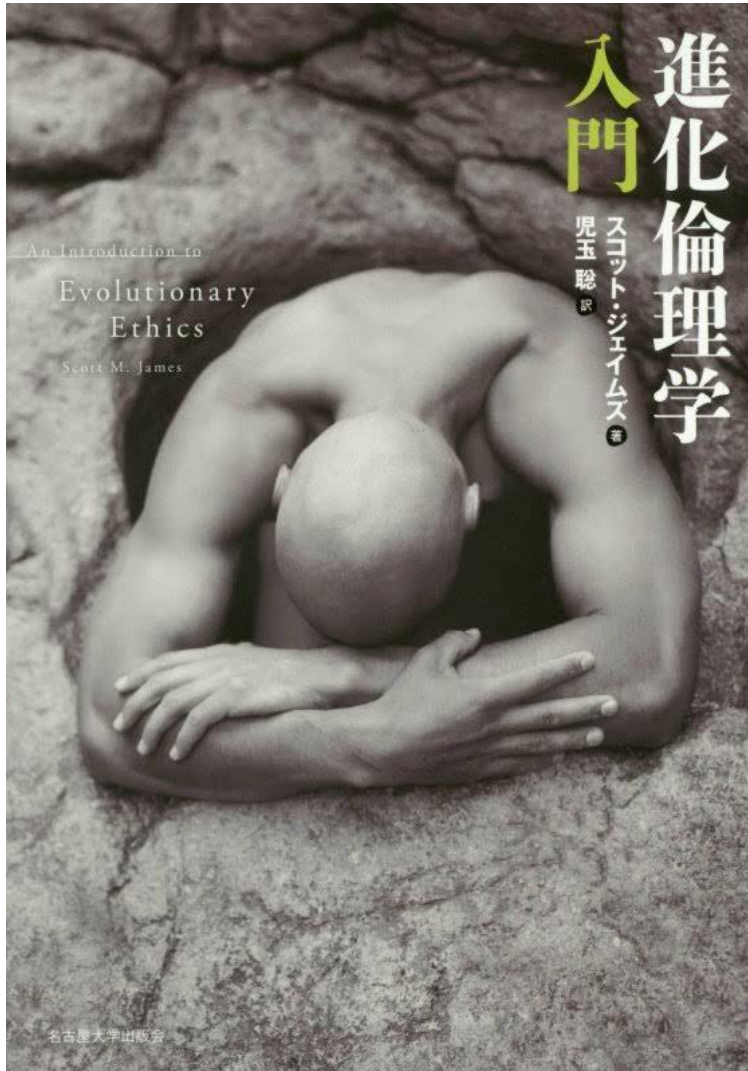
これは、進化倫理学を研究するうえで避けては通れない問いだが、これまでこの問いにうまく答えられてきたとは言いがたい。そこで、今回のWSを通じてこの問いに少しでも答えたい。

# 1. 趣旨説明

また、これまで進化倫理学という主題について研究者が議論する場自体がきわめて少なかった。この分野に関心を持つ研究者が少しずつ増えてきたこの時期を捉えて、こうしたWSを開催し、率直に議論することにより、進化倫理学研究、ひいては倫理学研究全体の発展に資する何らかのきっかけになるとよい。

以下、議論の前提となるような基本的な事項については、逐次提題のなかで簡単に説明していきたい。

# 1. 趣旨説明



## 2. 提題「道徳に関する事実を 進化的観点から説明する」

## 2. 提題

### 2. 1 シンガーによる論点整理

### 2. 2 道徳の合目的性の説明

#### 2. 2. 1 スミスの説明

#### 2. 2. 2 進化的説明

### 2. 3 おわりに：

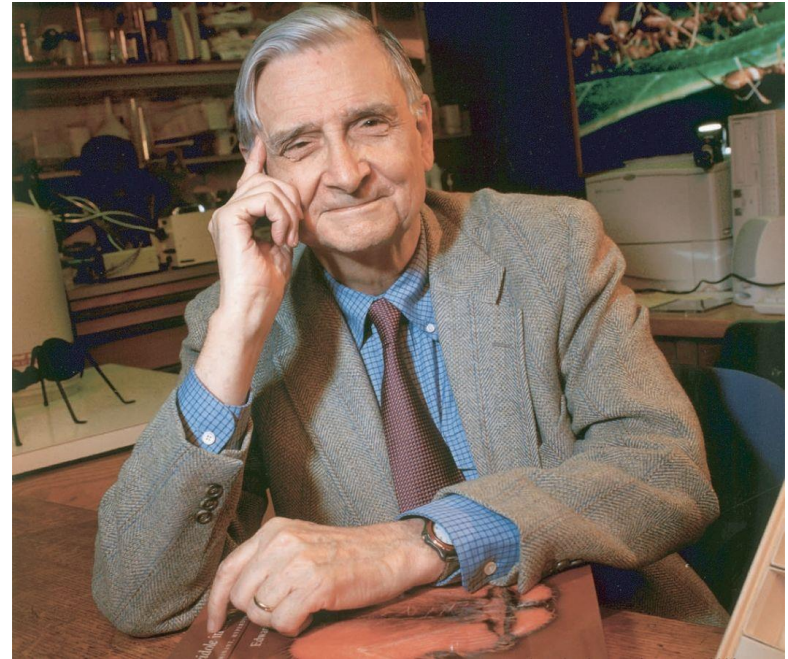
規範は正当化可能か



## 2. 提題

### 2. 1 シンガーによる論点整理

「倫理学が哲学者の手から一時的に取り去られ、生物学化 (biologicize) される時が来た可能性を、科学者と人文科学者はともに検討すべきだ。」 (Wilson 1975, p. 576)

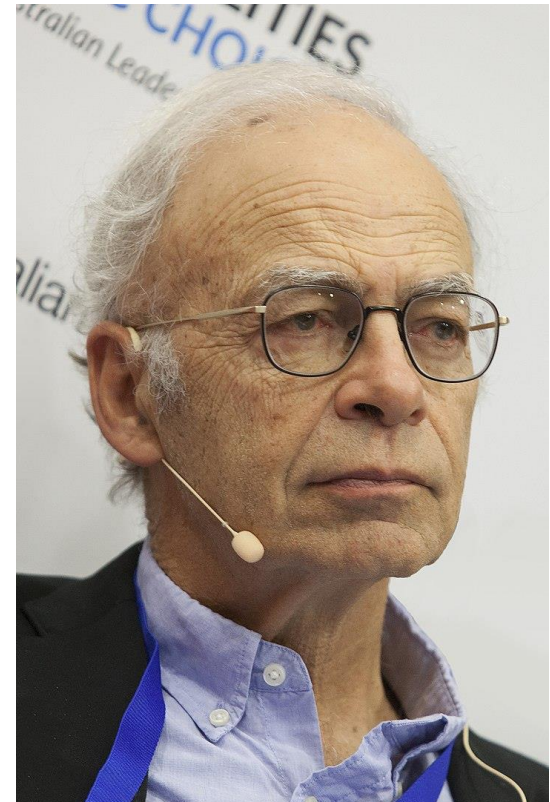


E. O. ウィルソン (1929-)

## 2. 提題

### 2. 1 シンガーによる論点整理

こうしたウィルソンの提案を受けて、シンガーは、著書『拡大する輪』 (*The Expanding Circle*, 1981) で、ウィルソンによる「倫理学の生物学化」の主張を次の三つに分析している (Singer 2011, pp. 62-3)。



ピーター・シンガー (1946-)

## 2. 提題

### 2. 1 シンガーによる論点整理

- ① 進化生物学は道徳に関する事実を提供する
- ② 進化生物学は道徳的規範の正当化を損なう（進化論的暴露論法）
- ③ 進化生物学は新たな道徳的規範を提供する

## 2. 提題

### 2. 1 シンガーによる論点整理

たとえば...

1. 人種差別を解決すべきである

2. ○○すると人種差別が解決する

∴ ○○すべきである

①の主張によれば、進化生物学は前提2を提供し、②の主張によれば前提1の(それゆえ結論の)正当化を損ない、③の主張によれば前提1に代わる新たな規範を提供する。

## 2. 提題

### 2. 1 シンガーによる論点整理

シンガーによれば、①と②の主張が真である一方、③の主張は以下のような論証に基づいており、それゆえヒュームの法則に反し、偽であると考ええる (ibid. p. 80)。

1. 私たちの遺伝子は共通プールから来て共通プールに帰る。
- ∴ 私たちは共通遺伝子プールを危険にさらすことをすべきでない。

## 2. 提題

### 2. 1 シンガーによる論点整理

したがって、「なぜ倫理学に進化が必要か」と問われれば、特に①の主張、すなわち...

道徳に関する事実の説明に必要だから

ただ、道徳に関する事実と言っても、それは上で見たような、実践的三段論法の小前提として使われるものに限られない。

## 2. 提題

2. 1 シンガーによる論点整理

2. 2 道徳の合目的性の説明

2. 2. 1 スミスの説明

2. 2. 2 進化的説明

2. 3 おわりに：

規範は正当化可能か

## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 1 スミスの説明

古来、哲学者たちは、道徳に合目的性（何らかの目的達成に貢献する性質）があるという事実を認識していた。

たとえばアダム・スミスは、有害な行為（罪過 [demerit] のある行為）に対して処罰を加えることの合目的性を認識し、その合目的性の事実を、憤怒 (resentment) という人間本性 (human nature) の合目的性により説明した。

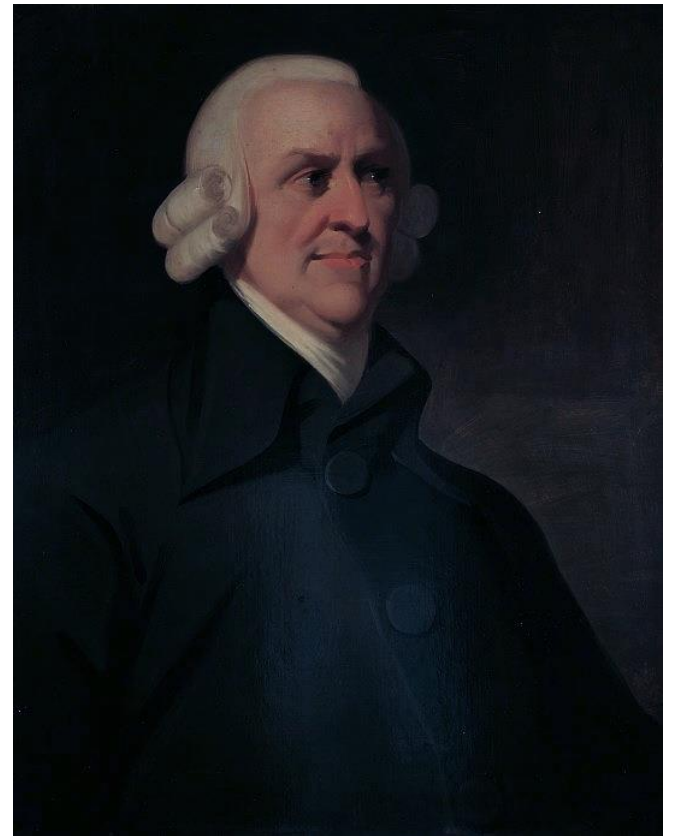


## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 1 スミスの説明

「その順守が私たち自身の意志の自由に任されておらず、力により強制でき、その侵犯が憤怒に、そして結果として処罰にさらされる……徳が存在する。この徳こそ、正義である。正義の侵犯とは危害である。それは、私たちが自然に否認する動機から、ある特定の人々に対して、現実の積極的な害をなすのである。」

(Smith 1976, p. 79)



アダム・スミス (1723-1790)

## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 1 スミスの説明

処罰の合目的性について、これまでなされてきた説明は次のようなものだ。

「正義の法がそれなりに順守されない限り、社会は存続しえず、互いに危害を加えることを一般に控えない人間の間で、社会的な交わりは生じえない。それゆえ、この必要性の考慮は、正義の法を犯した者を処罰し、それ〔正義の法〕を強制することを私たちが是認する、その根拠だと考えられてきた。」 (p. 87)

## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 1 スミスの説明

こうした社会の存続への顧慮、正義の必要性の考慮が、処罰による正義の法の執行の根拠だと考えられてきた。だが、その説明は本質的ではない（p. 71）。

「自然は、処罰の効用のあらゆる熟慮に先立って、……人間の心に、このうえなく鮮やかで消えることのない文字で、神聖にして不可欠な報復の法に対する即時的で本能的な是認を刻み付けた。」

## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 1 スミスの説明

そしてスミスによれば、「個人に対してなされた犯罪の処罰に対して、私たちに最初に (originally) 関心を持たせるのは、社会の保存への顧慮ではない」

(p. 89)。「憤怒」こそが「最も即時的かつ直接的に私たちを処罰へと駆り立てる感情」である (p. 68)。

このように、処罰が社会の存続という目的に適っているという処罰の合目的性は、憤怒の合目的性により説明される。

憤怒



処罰



社会の保存

社会の保存へ  
の顧慮



処罰

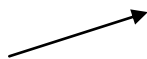


社会の保存

← 目的

← 手段

← 目的



意図せざる目的

## 2. 提題

2. 1 シンガーによる論点整理

2. 2 道徳の合目的性の説明

2. 2. 1 スミスの説明

2. 2. 2 進化的説明

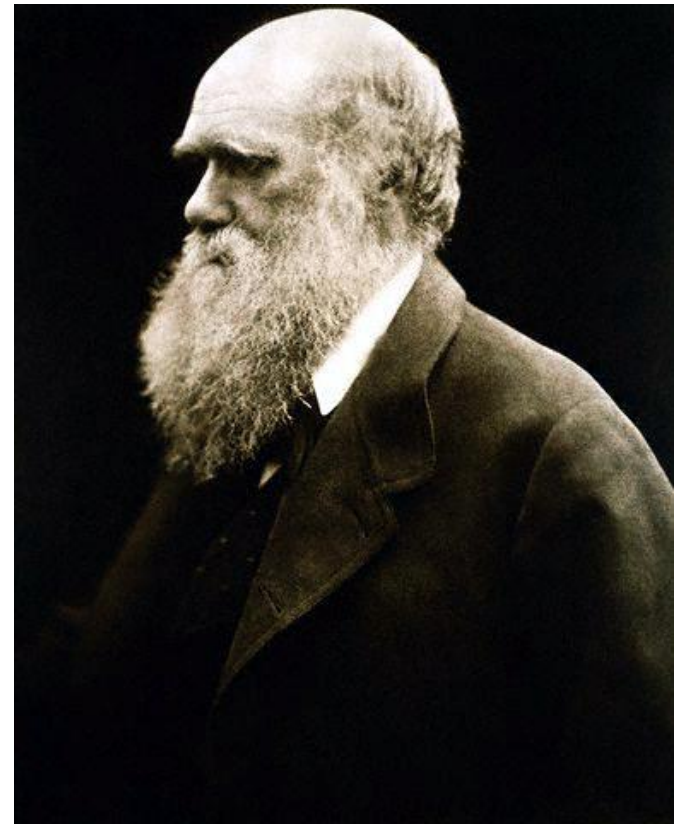
2. 3 おわりに：

規範は正当化可能か

## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 2 進化的説明

スミスは、人間本性の合目的性が神に由来すると考えていた。こうした超自然的説明に対して、その自然的説明が初めて与えられたのは、ダーウィンが自然選択による生物進化の理論を提唱したときだった。



チャールズ・ダーウィン  
(1809-1882)

## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 2 進化的説明

ダーウィンも人間が意図する目的と意図せざる目的を対比してこう述べる  
(Darwin 1871, p. 98)。

「すべての人が幸福を願うのだから、  
『最大幸福原理』は最も重要な二次的指針・目的となるだろう。しかし、共感を含む社会的本能が、常に一次的衝動・指針であるのだ。このようにして、私たちの本性の最も高貴な部分の基礎を卑しい利己性の原理に置いているという非難は取り除かれる。」



社会的本能



道德

← 目的



全体の善



意図せざる目的

利己性



道德

← 手段



全体の幸福

← 目的



## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 2 進化的説明

遺伝学・集団遺伝学が発展し、20世紀前半に進化の総合説が誕生すると、進化は生物集団における遺伝子頻度の経時的変化と定義された。

これに伴い、自然選択は厳密には、個体が持つのと同じ遺伝子の存続・伝播という目的に貢献するかに見える生物個体の適応（合目的性）を生み出すプロセスとみなされるようになる（cf. 森元・田中 2016, 1章, 3章）。

## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 2 進化的説明

では...

憤怒・処罰の合目的性はどう説明？

スミスは有害な行為が私たちの憤怒をかき立て、私たちを処罰へと駆り立てると考えていた。そして、私たちが有害とみなす行為は多くの場合、遺伝子の存続・伝播に悪影響を及ぼす行為だ。

## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 2 進化的説明

したがって、憤怒の動機づける処罰が有害な行為を受ける確率を減らすのであれば、それは遺伝子の存続・伝播という目的に貢献するかのように見え、それゆえ自然選択により進化しうる。

そして、憤怒が動機づける処罰は、少なくとも二つの仕方で有害な行為を受ける確率を減らしてくれる。すなわち…

## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 2 進化的説明

1. 有害な行動傾向を矯正する
2. 有害な行動傾向のある個体を遠ざける

まず1だが、進化のかなり早い段階で、多くの生物が不快を避けることを学習するようになったと考えられている（フアインバーグ&マラット 2017, 8-9章）。そして、処罰は不快を与える。

## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 2 進化的説明

それゆえ、有害な行為を行った個体に処罰を与え、有害な行為を行わないよう学習させ、有害な行為を受ける確率を減らすことができる。

次に2について、そもそも有害な行動傾向のある個体を処罰によって排除または隔離することによって、有害な行為を受ける確率を減らすことができる。

## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 2 進化的説明

このように、

- 有害な行動傾向を判断する
- 判断が処罰を動機づける

という形質が進化することは、利他・協  
力行動の進化をめぐる進化ゲーム理論研  
究からも示唆される。

## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 2 進化的説明

政治学者のアクセルロッドは、1980年ころに反復型囚人のジレンマゲームの戦略を世界中から募集し、2回のトーナメントを行った。いずれの大会でも優勝したのは、「しっぺ返し (tit for tat、TFI)」と呼ばれる戦略であり、初回の対戦では協力を選択、2回目以降は前回の相手の選択をまねるという単純な戦略だった (Axelrod 1984)。



## 2. 2 道徳の合目的性の説明

		Player B	
		協力	裏切り
Player A	協力	R = 3 R = 3	T = 5 S = 0
	裏切り	T = 5 S = 0	P = 1 P = 1

### 囚人のジレンマゲームの利得行列

欄中のRは、互いに協力しあったことによって得られる報酬 (reward)、Pは互いに裏切りあったことによって与えられる罰 (punishment)、Tは裏切りによってより大きな利益点を得られるという誘惑 (temptation)、そしてSは、安易に協力して痛い目を見るお人よし (sucker) をそれぞれ表している。このゲームは次の2式を満たすものとして一般化でき、行列はその一例を示している。

$$T > R > P > S$$

$$R > (T + S) / 2$$

## 2. 2 道徳の合目的性の説明

### 2. 2. 2 進化的説明

ここで重要なのは、T F Tが前回に相手が裏切った場合には裏切る戦略である点だ。つまりT F Tは、前回の相手の選択から裏切る傾向を判別し、その判断に基づいて報復的に裏切る。

この種の行動戦略が進化的に強力であることは、憤怒に動機づけられる処罰が遺伝子の存続・伝播という目的に貢献し、それゆえ進化しうることを示す。

## 2. 提題

2. 1 シンガーによる論点整理

2. 2 道徳の合目的性の説明

2. 2. 1 スミスの説明

2. 2. 2 進化的説明

2. 3 おわりに：

規範は正当化可能か

## 2 提題

### 2. 3 おわりに

以上のとおり、自然選択による進化は、道徳が合目的的であるという事実を説明してくれる。

仮にこうした事実の説明が真であれば、可能な規範理論の範囲を狭める制約として働きうる（説明と矛盾する理論を排除しうる）点で、進化は倫理学に貢献するだろう（cf. 浜田・千葉提題）。

## 2 提題

### 2. 3 おわりに

さらに、「有害な行為が悪い」という判断が自然選択が形成した人間本性の産物であるという説明は、この判断に正当化がないことを示唆する。

進化論的暴露論法 (evolutionary debunking argument) と呼ばれるこうした主張は、次のような考えに基づいている (Ruse & Wilson 1986, p. 186) 。

## 2 提題

### 2. 3 おわりに

「...倫理的法が最も深いレベルで、遺伝的進化により変化しうると述べるのは、まったく正しい。このことは明らかに、客観的で永遠なる真理の集合という道德の概念と矛盾する。道德はどこまでも、偶然的な人間本性 (contingent human nature) に根差している。」

つまり、人間本性が自然選択により進化したものであるなら、それにより生み出される規範も変化しうるものであり、客観的真理ではありえない。

## 2 提題

### 2. 3 おわりに

たとえば、「汝の隣人を愛せ」という規範が人間本性に基づくとき、仮に自然選択による人間の進化が別の仕方で生じたなら、私たちはいま持つのと異なる人間本性を持ち、私たちの持つ規範は「汝の隣人を憎め」というものだったのかもしれない。

したがって、人間本性がもたらす私たちの主観から独立した「実質的倫理の客観的正当化は存在しない」（Ruse 2017, pp. 97-8）。

## 2 提題

### 2. 3 おわりに

もしこの主張が正しいのなら、倫理学の最重要課題である規範の正当化はそもそも不可能だろう。なぜなら、規範は私たちが偶然的な進化過程で獲得した直観に基づくからだ (Singer 2005)。

このように、道徳に関する事実を進化的に説明することは、倫理学の有り様を反省的に問い直す観点としても有用だと言えるだろう。



## 参考文献

- Axelrod, R. (1984). *The Evolution of Cooperation*. Basic Books.
- Darwin, C. (1871). *The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex, Vol. 1*. John Murray.
- Ruse, M. (2017). Darwinian Evolutionary Ethics. In M. Ruse & R. Richards (Eds.), *The Cambridge Handbook of Evolutionary Ethics* (Cambridge Handbooks in Philosophy, pp. 89-100). Cambridge University Press.
- Ruse, M., & Wilson, E. O. (1986). Moral Philosophy as Applied Science. *Philosophy*, 61(236), 173-192.
- Singer, P. (2005). Ethics and Intuitions. *The Journal of Ethics*, 9(3-4), 331-352.
- Singer, P. (2011). *The Expanding Circle: Ethics, Evolution, and Moral Progress*. Princeton University Press. Originally published in 1981.

- Smith, A. (1976). *The Theory of Moral Sentiments: The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, Vol. 1*. Oxford University Press. Originally published in 1759.
- Wilson, E. O. (1975). *Sociobiology: The New Synthesis*. Harvard University Press.
- ジェイムズ, S. M. (2018). 『進化倫理学入門』. 児玉聡訳, 名古屋大学出版会. 原著2010年.
- ファインバーグ, T. E., & マラット, J. (2017). 『意識の進化的起源：カンブリア爆発で心は生まれた』. 鈴木大地訳, 勁草書房. 原著2016年.
- 森元良太・田中泉吏 (2016). 『生物学の哲学入門』. 勁草書房.
- 矢島壮平 (2010). 「道徳判断の機能について——進化的互惠性概念からの一仮説——」. 『哲学研究論集』, 6, 67-80.
- 矢島壮平 (2020). 「倫理の情報・情報の倫理」. 中央大学国際情報学部編 『国際情報学入門』, ミネルヴァ書房, 17-28.



ご清聴ありがとうございました。  
yajima@tamacc.chou-u.ac.jp